



2016年熊本地震により被災した 装飾古墳の復興に向けて

熊本県において4月14日に発生した前震(M6.5)と4月16日に発生した本震(M7.0)では、多くの文化財が甚大な被害を受けています。2016年度末までに集計された熊本県の報告によると、国指定・国登録文化財301件中100件が、県指定文化財では384件中60件が被災しています。また、これに加えて市町村の被災文化財は198件であり、さらに未指定のものを加えると膨大な量の文化財が被災しているという状況にあります。

熊本県には、石室や羨道に彩色や線刻等の装飾をもつ装飾古墳が数多くあります。日本にはおよそ660基ほどの装飾古墳がみつっていますが、実にその30%が熊本県に存在しているのです。今回の地震により、これら装飾古墳の多くが被害を受けました。昨年度、文化庁は、「大規模震災における古墳の石室および横穴墓等の被災状況調査の方法に関する検討委員会」を組織し、熊本県と共同で県内市町村の協力を得ながら、装飾古墳の被災状況の調査をおこないました。調査をおこなった装飾古墳に共通して認められた損傷には、石室石材の原位置からのズレや崩落、破断、土砂の流入等があります。

特に、国史跡の井寺古墳(嘉島町)と釜尾古墳(熊本市)では、墳丘に亀裂が入り、石室内に入ることができず、古墳内部の被害状況を把握することができない状況が続いていました。奈良文化財研究所では、文化庁と熊本県の要請を受け、この2つの古墳に対して、ファイバースコープと小型のモニタカメラを用いた羨道および石室内の観察と撮影をおこないました。井寺古墳では、羨道部において側壁の傾斜が大きくなり、石材が落下し、土砂が流出していることが、玄室内においても石材が崩落していることが認められ、特に石室南側の壁に大きな亀裂が

できていることも確認されました。いっぽう、釜尾古墳では、羨道部において、天井石の崩落、側壁のはらみと石材の崩落、土砂の流出が、玄室において、積石のはらみ、亀裂の拡大、積石の崩落が認められました。この2つの古墳については、現在、修復整備のための委員会が組織され、さらなる被害状況の把握のための調査手法の検討が始められたところです。しかしながら、今城大塚古墳(御船町)や天神山古墳(宇土市)のように、墳丘が崩壊した状態で全く手が付けられていないものもあります。また、現状では石室内に入ることができるものについても、構造上の変化が認められ、その安全性が担保できないものもあります。これらの装飾古墳をいかにして安全性を確保していくのか、その問題は山積しています。

奈文研では、まずはその被害状況のデータを得るために、多視点ステレオ写真測量(SfM-MVS)、物理探査等の可視化のための技術協力をおこなうとともに、古墳の調査や保存に対する専門家派遣等、熊本地震で被害を受けた装飾古墳の復旧復興に向けて、全面的に協力をしていきます。

2016年熊本地震により被災した装飾古墳の復興はまだまだ前途多難です。奈文研では、被災文化財の救援のための募金活動もおこなっています。皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

(埋蔵文化財センター 高妻 洋成)



亀裂を生じて崩落している今城大塚古墳
(写真提供：御船町教育委員会)